タイトル：2024 年度 教育セミナー（第 20 回）
日時：2024 年 9 月 19 日（木）～22 日（日）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 大会議室（303）

権威主義体制の統治能力・外交能力：中央アジア諸国を例に

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター／AA 研
宇山　智彦

権威主義体制研究の重要性：「民主化の第三の波」と言われた時代はもはや遠く、世界の約半数の国は権威主義的な政治体制を持ち、しかも民主化しつつある国より権威主義化しつつある国の方が多い。中東・中央アジア諸国のほとんどは権威主義的である。政治学の体系は基本的に民主主義体制を念頭に構築されており、権威主義体制はそこからの逸脱だと暗黙に観念されやすく、従来の研究は体制の持続と崩壊の条件に過度の注意を集中させがちだった。しかし、権威主義体制は権力の追求という為政者のある種の本性に基づく体制であり、決して逸脱的なものではない。しかも、政治的多元性を高めることによるリスクや大規模な政治動員を行う手間を避ける、ある意味では合理的な体制である。世界の現実を理解するためにも、また民主化の展望を考えるための前提としても、権威主義体制が実態としてどのように機能しているかを研究することは重要である。

権威主義的ガバナンス：効率的で透明・公平な統治を意味するガバナンスという概念は民主主義と関連づけて理解されることが多いが、効率的な統治能力の向上は、ある程度有能な権威主義体制の下でも可能である。また、現在の世界では経済的アクターと社会的利害の多様化が進んでおり、権威主義的な国であっても、多くの場合、社会の状況に関する情報収集を行い、ニーズをくみ上げて利害調整を行うことなしには、安定した統治を行うことは難しい。反政府的でない限りの国民の声とニーズへの応答性を高め、個々の行政官に責任を取らせつつ政権中枢の責任を回避する疑似的アカウンタビリティと、政権の都合に合わせた法による支配（rule by law rather than rule of law）、力による安定が、権威主義的ガバナンスの特徴となる。

権威主義体制の「進化」：市民社会組織、経済改革、管理できる範囲での政治的競争、新しいコミュニケーション・テクノロジー、多様な国々との国際的リンケージといったツールを選択的ないし限定的に使うことにより、権威主義体制は抑圧的ではありつつも「進化」していく。このような進化は新しい技術を取り入れているだけではなく、国家が直接果たす役割を狭めつつ監督機能の効率を高める新自由主義（ネオリベラリズム）とも関連しており、欧米などで新自由主義がもたらした民主主義の形骸化・後退と、非欧米圏における権威主義的ガバナンスの進化は、パラレルな関係にある。近年では中国やロシアをはじめ、社会的コストの高い抑圧措置への依存という意味で「退化」が見られる国も増えているが、それらの国でも統治能力を維持・向上させる試みは続いている。

中央アジア諸国の「改革」とその評価：権威主義体制の統治能力向上の試みの例として、本講義では中央アジア諸国の場合を検討した。ソ連解体によって独立した諸国は、経済および秩序の再建（それはしばしば権威主義化を伴った）と、独立国家建設を並行して行うことを迫られたので、独立後の歴史は権力の再強化と脱社会主義化改革の歴史でもあった。各国の権威主義化や改革のあり方は極めて多様だったが、かつて共産党がエリートの統合や個別利益の調整のために公式・非公式に果たしていた機能を大統領とその側近たちが代替し、大統領を頂点とするパトロン政治が成立したことは共通している。このような体制は、トップダウンの命令による効率的な政策実行や力による紛争解決と、政策のマンネリ化や腐敗の両方に結びつきうるものである。カザフスタンとウズベキスタンでは、権威主義体制を維持しつつもある程度の自由化・透明化を行う改革が 2010 年代後半以降進められてきた。他方、大衆の街頭行動を伴う政変が繰り返されたクルグズスタン（キルギス）では、改めて大統領に権力を集中させて経済成長を進める路線が採られている。ガバナンスに最も問題があるトルクメニスタンとタジキスタンでは、問題を隠すことによって安定を保とうとする傾向が見られる。

権威主義体制と国際関係：権威主義体制と国際関係のかかわりについては、権威主義体制の国際的拡散や国際連携といった観点から単純化した議論が行われがちだが、実際には国によって外交方針は極めて多様であり、権威主義的諸国としての単純なまとまりはない。なぜなら、国内体制と同様に外交においてもトップダウンの意思決定がなされ、客観的な国益と指導者の好みや個性が組み合わされながら外交が展開されるからである。プーチンや習近平による大国主義外交と、中央アジア諸国の指導者による基本的に平和志向の多ベクトル外交は大きく異なり、中央アジア諸国の間でも、ミドルパワーによる積極外交を唱えるカザフスタンから、難しい問題を避けようとするトルクメニスタンまでさまざまな傾向が見られる。大国主義や中小国の生存戦略と、国内の権威主義体制がどのように関係しているのか、今後研究を深めていく余地は大きい。